

やさしい**仏像**の見方

西村公朝 飛鳥園



新潮社

やさしい仏像の見方

西村公朝 飛鳥園



本書に掲載した下記の図版は『仏像の再発見』『仏の世界観』（いずれも西村公朝氏著、吉川弘文館刊）による。
38-39ページの「阿弥陀の世界をあらわす九品の印相」。
43ページの「蓮華座各部の名称」。
104-105ページの「三十三間堂の十一面千手観音の持物配置」。



やさしい仏像の見方

発行——一九八三年一月二五日

一三刷——一九八五年一月一〇日

定価——一、一〇〇円

著者——西村公朝
飛鳥園

発行者——佐藤亮一

発行所——株式会社新潮社

住所——〒162 東京都新宿区矢来町七

電話——業務部 (03) 二六六—五一一
編集部 (03) 二六六—五四一

振替——東京四—八〇八

印刷所——凸版印刷株式会社

製本所——加藤製本株式会社

カバー印刷所——錦明印刷株式会社

装幀——平野甲賀

© Shinchosha, Printed in Japan 1983

乱丁・落丁本は、御面倒ですが小社通信係宛御送付下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。

目次

文・カット 西村公朝
写真 飛鳥園

序 仏像ができるまで

3

仏の姿 三十二相・八十種好

9

如来

23

如来の着付

30

五智如来

34

印相

36

蓮台

40

菩薩

45

菩薩の着付

50

仏像の髪型

58

二十五菩薩

60

明王

62

愛染明王

65

不動明王

66

五大明王

70

明王の着付

72

天部

仁王の着付

78

四天王

82

邪鬼

84

須弥山

86

結

如来はどこにいます？

90

仏の姿に三つある

97

附

天衣

100

持物

102

羅漢

106

仏舍利

110

地藏菩薩の頭

112

仏の位

113

色

114

数珠

115

千支別守り本尊

116

十二神将

118

見返しは橘夫人厨子の蓮池 法隆寺蔵
扉は板彫十二神将像のうち迷企羅大将 興福寺蔵

興福寺蔵



やさしい仏像の見方

西村公朝 飛鳥園



目次

文・カット 西村公朝
写真 飛鳥園

序 仏像ができるまで

3

仏の姿 三十二相・八十種好

9

如来

23

如来の着付

30

五智如来

34

印相

36

蓮台

40

菩薩

45

菩薩の着付

50

仏像の髪型

58

二十五菩薩

60

明王

62

愛染明王

65

不動明王

66

五大明王

70

明王の着付

72

天部

仁王の着付

78

四天王

82

邪鬼

84

須弥山

86

結

如来はどこにいます？

90

仏の姿に三つある

97

附

天衣

100

持物

102

羅漢

106

仏舍利

110

地藏菩薩の頭

112

仏の位

113

色

114

数珠

115

千支別守り本尊

116

十二神将

118

見返しは橘夫人厨子の蓮池 法隆寺蔵
扉は板彫十二神将像のうち迷企羅大将 興福寺蔵

興福寺蔵



序

仏像が
できるまで

指先がふつくらとやわらかく慈悲の形を示す仏の手

十一面観音像 聖林寺 天平時代



釈尊は紀元前六世紀にインド、ヒマラヤ山脈の南麓、カピラ

城の王子として生れましたが、生れてまもなく母と別れるという悲しみに遭遇しています。しかし王子ですから生活の上では、何不自由なく育てられました。釈尊は成長するにしたがつて、周囲の人々を見て、人間は皆共通した悩みを持っている、ということに気づきました。この悩みとは、四苦八苦ということです。四苦とは、生れる苦しみ、年をとる苦しみ、病氣をする苦しみ、そして最後に死という苦しみ、つまり生老病死をいい、さらに愛別離苦、怨憎会苦、求不得苦、五陰盛苦の四苦とあわせて八苦となります。そこで四苦八苦に悩んでいる人たちをどうしたら救えるかということを実剣に考え続け、ついに二十九歳で城を出ます。そして六年間苦行して、三十五歳で悟りを開き、八十歳で亡くなるまでの四十五年間大衆に向って、人間としてこの世に生れた以上どうすれば正しい生活がしていけるか、そしてどうすればその苦しみから逃れることができるか、というようなことを説法しました。この説法の内容を後に坊さんたちが文章としてまとめたものが經典で、その完成は紀元一世紀頃です。ですから釈尊が亡くなって、約六百年後に今日我が国で見ている經典ができたのです。

この經典の中にいろいろな仏の名前が出てきます。例えば觀音經には、觀音さまというありがたい仏がいるということが細々と書かれています。しかし、どの經典もその仏さまの姿、形ということについては、まったく触れておりません。まずお経の内容を見ますと、釈尊が仏の説明をしており、大衆の方からその仏はなんでそういう名前がついたのか、どういう功德がありますかなどと質問しています。それなのにその仏の姿についてはまったく質問していないのです。

そこで後の坊さんたちは、いろいろの經典を何度も読み、また自ら苦行もして、仏とはこういうものだろうと自分なりに体得した悟りを大衆に伝えるようになりました。これが今日伝わっている多くの宗派となっているのですが、なぜ釈尊の在世中に仏の姿とはどういうものかという質問が出なかったのでしょうか。おそらく、釈尊在世の当時、大衆にとっては、釈尊の姿を見、顔を見ているだけでもありがたい、声を聞いているだけでもありがたい、こういうような状態で、現実の釈尊の姿を通して、その仏を想像するだけで、仏とはどんな形かという質問をしなかったんだと思います。

その釈尊が亡くなると、説法を聞けなかった大衆は非常に残念がり、釈尊の姿を見た人に、どんな方だったかと聞きます。するとお釈迦さまの背の高さ、顔、形、声など、見た人は見なかった人に伝えます。その内容は大きくいえば三十二の特徴があり、細かくいえば八十の特徴がある。これを如来の三十二相・八十種好といいます。そうしますと見なかった人は、見た人にお釈迦さまの像を作ってもらいたい。しかし見た人は、我々のような人間には、あの尊い釈尊の姿はできない、作れない。それではお釈迦さまはどれくらいにえらい方だったか。見た人は人類の王様のようにだ、太陽のようにありがたい方だとい、そこで太陽を図案化して輪宝というシンボルマークを作って、その輪宝を釈尊として拝むようになりました。また釈尊の歩まれた道、釈尊が立つて説法しておられた場所、その場所に仏足跡を作って、その上に立つ釈尊の姿は表現せず、仏足跡を拝むようになりました。また菩提樹の前で座禅しておられたというので、菩提樹だけを表現して、その前に座す釈尊の姿は作りません。こういうふうにして、釈尊が亡くなった当時はこのシンボ

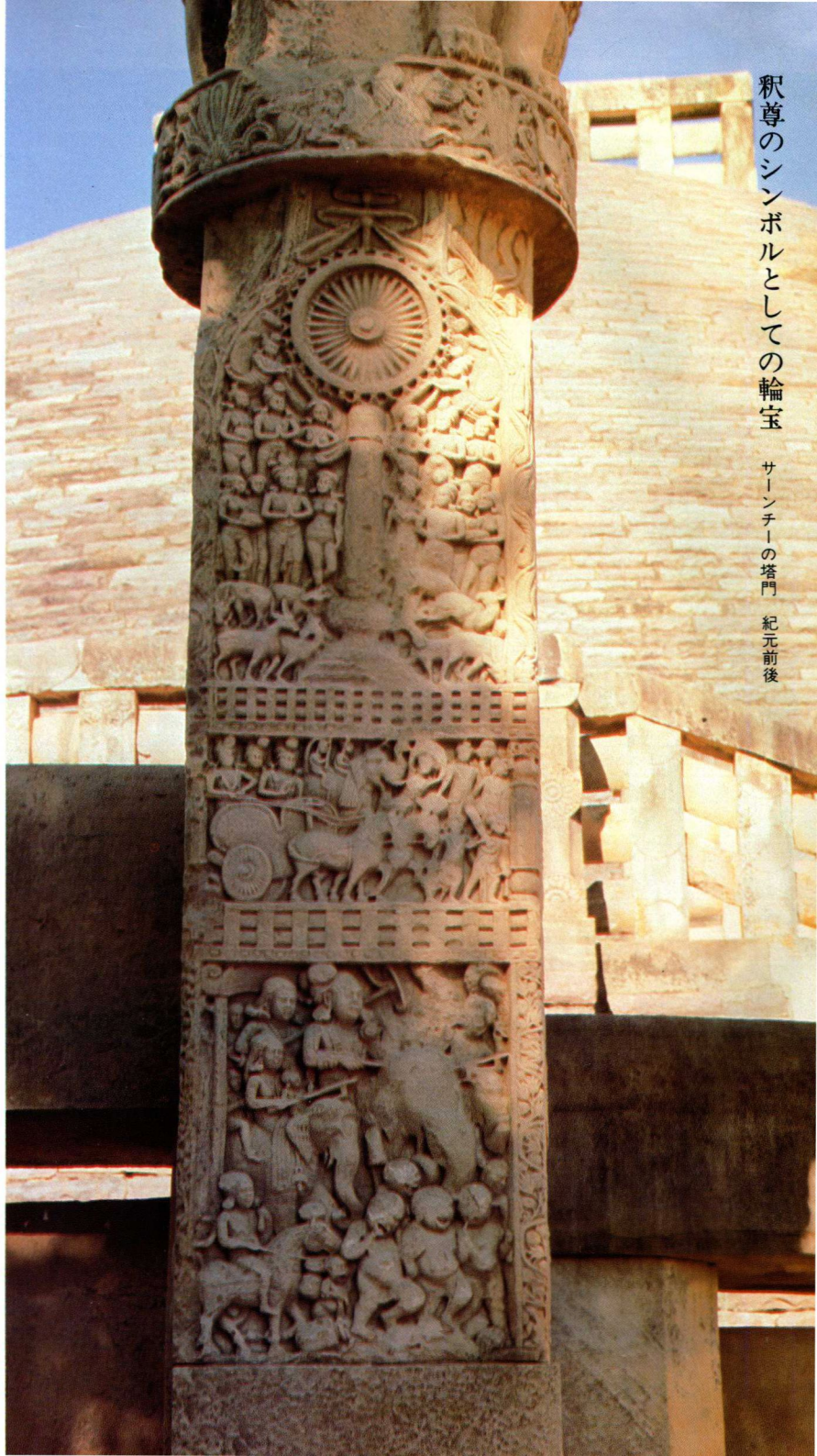


釈尊のシンボルとして拝んだ椅子と輪宝

アマラーヴァティー出土のレリーフ ニュー
デリー国立博物館 2世紀 撮影・田枝幹宏

釈尊のシンボルとしての輪宝

サーンチーの塔門 紀元前後



ルマークを信仰の対象としました。

しかし釈尊を見た人たちも、亡くなってしまおうと、このシンボルマークだけでは満足できません。そこで三十二相・八十種好、これを参考にして釈尊の像を作ろうということが考えだされ、約三百年後に仏陀の像ができました。これを仏像といいま

す。

こうして仏陀の像ができると、今度は釈尊の説法の中にでてくる多くの仏の像を作ろうということになります。ところが残念なことに釈尊の在世当時に仏の姿を聞いておかなかったのです。しかし、なんと少しでも仏の姿を作りたいという願望が大

衆からもりあがりました。

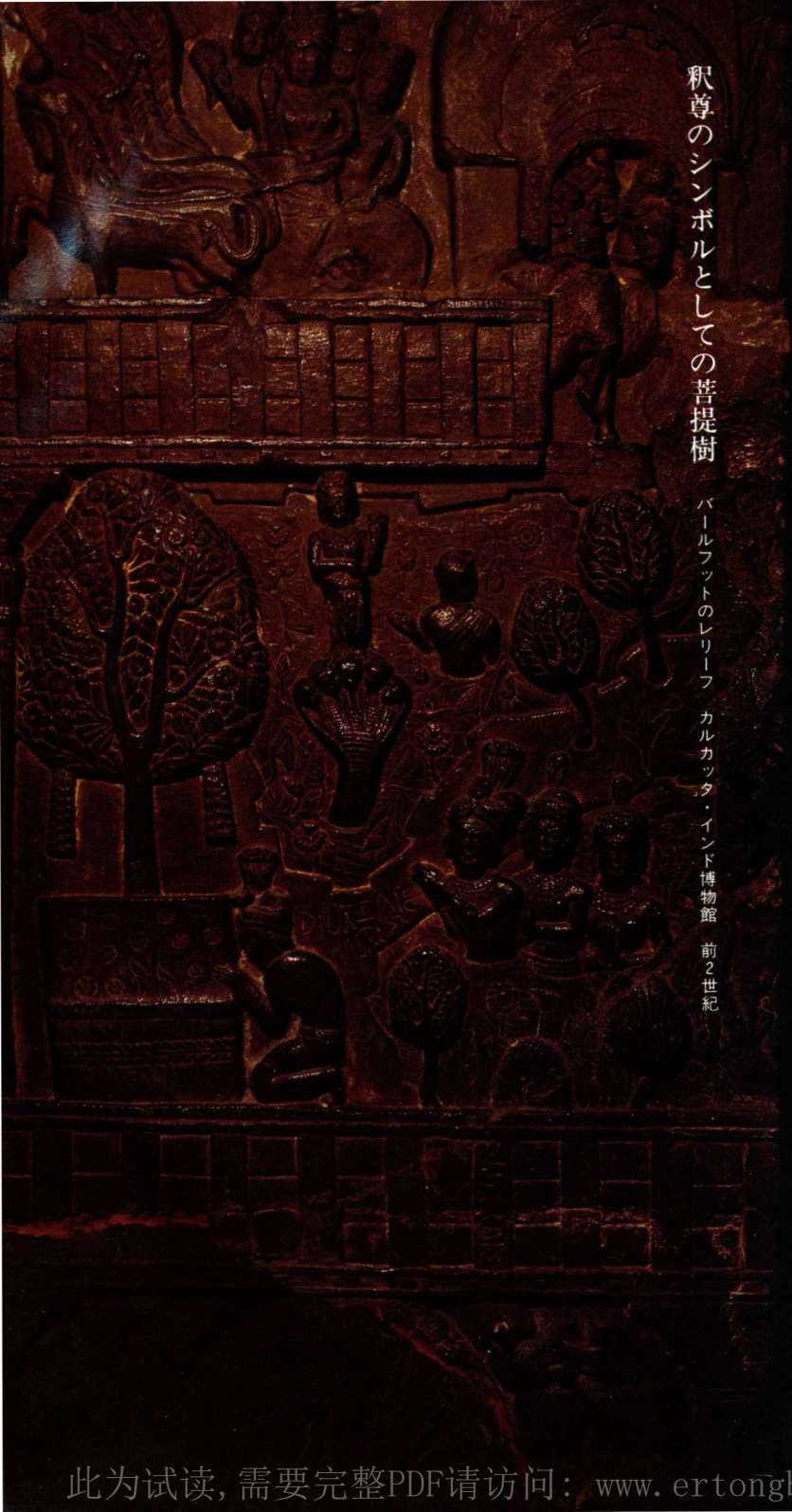
釈尊は宇宙のもつ偉大な力、法力、これらを「仏」といつているのですが、この仏を信仰の対象として形に表わそうとすると、大変なことになります。例えば、土という法力をどう形に表わしたらいいか。今日の芸術家ならばできるといってしょうが、それは抽象的な表現となってしまうはずでず。そうした抽

象的表現では本人にはわかってても大衆にはわかりません。誰にでもわかりやすい形、つまりその像を拝むだけでも釈尊の説かれた經典の内容がすべてわかるような、そういう信仰の像にするには具象的な方が理解しやすいのです。そこで仏の姿を人格化表現することにしました。

では人間の姿で表わすにはいったい誰を参考とすべきか、そ

釈尊のシンボルとしての菩提樹

パールフットのレリーフ カルカッタ・インド博物館 前2世紀



れはなんといつても釈尊の姿です。幸い如来の三十二相・八十種好が伝わっています。その姿態をもとにして、仏の姿をすべて人格化表現することになりました。これが今日我々が見ている仏像なのですが、紀元一世紀頃に作られたと言われています。

仏の世界にはいろいろの仏がいます。例えば阿彌陀如来や薬師如来、大日如来という如来のグループ。また十一面観音菩薩、千手観音菩薩、地藏菩薩という菩薩のグループ。また不動明王、愛染明王という明王のグループ。また四天王や十二神将、仁王という天部のグループ。この四つのグループにわけられます。この仏たちにそれぞれ釈尊の姿をモデルとして取り入れたのです。

作品ならば、作者が自分の考えによって、自分の個性を生かして自由に表現していいわけです。ところが、仏像はお寺にまつり、信仰の対象として多くの信者たちが拝むわけですから、これは作者の意図だけではないといけないというものがあります。つまり仏教のいわば真髄というものがそこに表現されていなければならない像とはならないからです。

では仏教の真髄とは何か。それは慈悲だといわれています。キリスト教では愛だといわれています。慈悲も愛も、ともに人が人を愛するという点では同じですが、愛だけだと、例えば、私は死ぬほど彼氏が好きなんだといっても、裏切られるとたちまち憎しみにかわり、殺してやろうというふうにかかります。しかし慈悲の方は、親子の愛情なのです。親が子に対する愛情です。例えば、子供に裏切られても、親はやはりその子がかわいい。この徹底した愛のことです。この慈悲を作品のどこかに表現しておかないと信仰の対象にならないのです。ではその慈悲を形にするとどういうものになるのでしょうか。

満員電車の中で、自分の赤ん坊をだっこしている人がいたとします。もうはおずりしたいほどかわいいのですが、他に乗客がいるので、素知らぬ顔をして抱えています。ところが、もし電車が急停車しても、絶対その子は落さないという抱き方をしているのです。例えば、足の踏んばり、肘のかまえ、指先の形、すべてにその子をかawaiiという一心の姿があります。これが慈悲の形になるのです。また我々の指先というのは、物をひつかいたり、つかんだりするために指先に力があるようになっている。しかし、こういう指先で、柔らかくて軽い赤ん坊をつかんではいけません。指先はあくまで柔らかくふつくらしたスポンジのような感じで、その赤ん坊を抱きかかえる。このように、指先にも慈悲の形があるのです。

この慈悲をもう少し分類すると、慈とは、お父さんのように厳しい。悲とは、お母さんのように優しい。つまり仏像には、厳しさと優しさの表現がなければならないといわれています。そして、如来、菩薩、明王、天部という、大きく分類できる仏たちに、この慈悲の表現の役割が決められているのです。

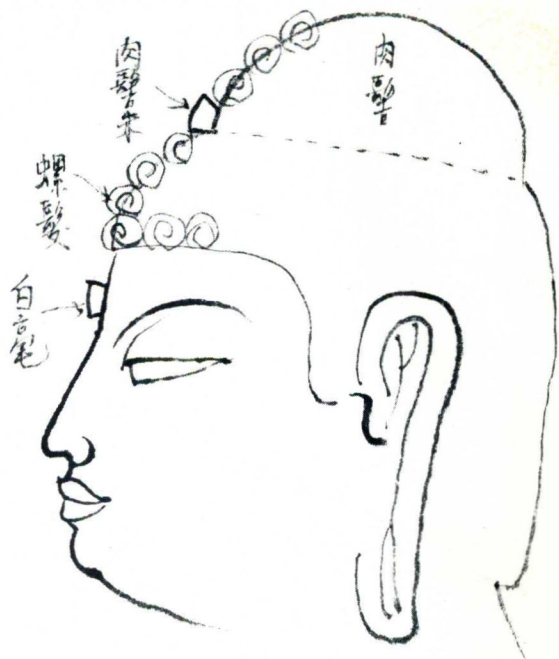
それから仏にはいろいろ異なった法力があります。これを表現するのに、服装とか、指先を動かしていろいろその法力を示す印相というのがあり、また蓮台（蓮華座）に乗るもの、岩座に乗るものなど、台座の形も定められ、このように仏にはそれぞれの法力にふさわしい形が決められているのです。これらのことは經典から僧たちが学び、仏師たちに教え、その弟子たちへと伝えられました。この伝えを記録したものを儀軌といえます。この儀軌をまちがえては仏の法力が発揮されないとまていわれるほど大切なものとなっています。

仏の姿 三十二相・八十種好

理想の美を凝集したみ仏の顔

釈迦立像 マンドラ博物館 5世紀





如来の頭部

それでは三十二相・八十種好というようなことがいつ頃言われたかといいますが、じつは私もよくわかりませんが、中村元氏の『仏教語大辞典』によってみますと、いろいろな経文の中に三十二相・八十種好のようなものがでてくる。ところがそれが全部一つにまとまっているということではなく、あちこちにばらばらに書かれているのです。それを後に三十二相と八十種好に整理しようです。

これによりますと、お釈迦さまは尊い姿をしておられるというので、足元から見上げて行くように書かれています。ですから真つ先に足の裏がどのようにになっているか、そこからはじまっている。しかも順序よく頭の天辺まで書かれていけば良いのですが、それがばらばらなのです。というのは、お釈迦さんが

亡くなってから阿羅漢（106ページ参照）たちが、お釈迦さんの姿はこうでお顔はこんなだったというようなことを言い合った。その順になつていて、しかもあとからまた、こうでもあったと付け加えているのです。それで全体的に統一されていないのだと思います。今回それを整理して、私たちが仏像を拝する時の気持ちになつて、頭の先から、それがどうなっているかを語ってみたいと思います。

お釈迦さんの体は金色であつた。肌の色が金色で、体からは光が出ている。その光の長さは各一丈（約三メートル）で、四方に向つて放射している。お釈迦さんが大衆の中にいると、お釈迦さんの所だけにスポットライトが当たっている状態になるわけで、お釈迦さんの体の背後は丸い光で照り輝いていることになります。これは仏像の方で言えば、輪光背に当るわけです。

四方に光を発し、特に背の方に輪光背のように光があるのです。では、その皮膚はどうかと言いますと、非常に細やかで滑らかであつて、清浄で汚れない。悪いにおいもないし垢もついていない。肌には、私たちの細胞のようなものもあつて、毛穴もあるわけですが、そこから妙な香りを出している。そして、その体全体に潤いがあり、滑らかで、非常に柔軟で、やわらかくて、塵や埃がつかないというんです。それから皮膚には、疥癬とか、疥癬にかかったような跡もないし、黒子もないし、疣もないし、瘤もない。体毛は全部上になびいて、右旋している。色は紺青。群青よりももう少し濃い紺青色。光沢があつて、非常にきれいで、孔雀の羽根のようだというのです。金色の上に紺青色のうぶ毛がふわあつとあるわけですから孔雀みたいになるでしょう。

頭の頂上は肉髻相である。瘤とは違って、われわれ人間より



阿弥陀聖衆来迎図部分 高野山有志八幡講十八箇院 平安後期

仏の髪を表現するには白緑を塗り その上に紺青色を重ねる

も知恵袋が余分にあったというので上にぽこんとふくれている。これは何人も見ることができないと言うのです。ということは、後にも出てくるんですけど、お釈迦さんは非常に偉大である、というので大きく背が高いわけでした、下から仰いだら、ふくれているのが見えな。ただ涅槃の時には横になりますので、はじめて見たのでしよう。

髪は毛は長くて、紺青色で、緻密にはえている。抜け毛とか、禿（はげ）というものは。それで仏像の如来とか菩薩をつくる場合、彩色する時には紺青色を塗りますが、最初白緑（びやくろく）の色を塗って、その上に紺青色を塗りつぶしていきます。これが生え際なんです、髪の毛はいい香りがして清潔であって、毛の一本一本が非常に細やかで、やわらかくて、滑らかで、光沢があって、右にまわっている。だから仏像の螺髪（らうはつ）が全部右まわりであるわけです。そうすると、ぐじやぐじやになるのではないかと思うと、そうではなしに、たいへん整然として、櫛（くし）を入れたように美しい。髪の毛は一本一本が堅固であって、中間で切れたり、折れたりしてない。断落しない。

額は広くて、円満であつて平らである。その形はことのほか妙なるもので、中心の眉間の所に**白毫相**がある。白い毛が一本あり、それも右まわりであつて、いつも光を放っている。これを如來の慈悲の光だといっています。仏像の場合ですと彩色で白い線描きをしているのもありますし、その位置に穴をあけて、白毫をはめこむ。これには水晶製のものをはめこむのですが、そうしますと、燈明などをつけると、その水晶がきらつと光る。これが白毫の光ということになります。

眉毛は非常に長く、細く、毛の一本一本が細くて、やわらかである。その眉には高貴な感じがあり、光があつて、潤いがあり、形は三日月のようである。初月の如しとなっていますので、三日月のことだと思ひます。その眉毛は非常に美しく、あてやかで、紺瑠璃色である。紺青のように青くて、ガラスのようにすき透つた、そういう美しさです。仏像の彩色の時も、髪と同じように、まず白緑で描いておきまして、その上に群青を塗るんです。

目玉（瞳）は金色であつて、金色の水晶のようだが、どつちかというとし青みを帯びている。ですから白目の部分と瞳の部分とがはつきりしていて、にごつていない。目は非常に大きくて、青い蓮華の葉のようなのですが、青い蓮華の葉っぱが開いている、そういう大きい目だということです。そしてたいへんに愛くるしい。睫毛が非常に長い。牛の睫毛のように長い。そして上まぶた、下まぶたには毛が密生して、抜けたようならばらばでなく、ぴちぴちとそろっている。白い毛は一本もまざっていない。

鼻はきわめて高く、まっすぐであつて、その穴は現われずと言いますから、鼻の穴がみえない。ぺちゃんこの鼻であつたり、

上向きの鼻だつたら鼻の穴が見えますが。仏像の場合、奈良時代の仏像では、鼻の穴がリアルに奥の方まで深く彫つてあります。それが鎌倉時代になりますと、ただ単に穴だけあけているという仏像があるんです。一方、平安朝の密教風の仏像のなかには、いわばノミで削つただけの像が多くみられます。そういう仏像では、鼻の穴は彫らずに、ノミでコンコンとその位置を示しておくだけなんです。影の具合で鼻の穴らしいと感じさせる彫り方をしているんです。

唇の色は非常に赤くて、丹色である。そして光沢があつて、潤いがあつて、**頻婆果**（赤い色の果物）という果物の赤い色と同じような唇です。口を開けますと、**齒は四十本**。われわれ普通人は三十二本。その齒は全部形が整つていて、まっ白であり、密であつて、齒と齒の間にすき間がない。その齒の中に犬齒が四本あるが、特に清浄で、犬齒そのものが非常に美しい。それは丸味をおびて、白くて、光があつて、清潔な感じがする。先の方がややとがつている。喉の方から、唾液が出てくるわけですが、その唾液は、何を食べてもおいしい味にかえる唾液です。そういう唾液がどんどん出ているということです。

声は高低が自由自在であつて、遠くの人にもよく聞え、近くの人にも鮮明に聞える。遠近に達して、話を聞こうとする人すべてに聞きとれるような声である。声を一声出すと、言葉の内容の威徳というものが、遠い所まで振動をもつて伝わっていく。象とかライオンとか、百獸の王が吠えるような、そういう声のようになつて振動が伝わって、お釈迦さんの威徳が伝わっていく。その声の余韻は美しく、妙にして、谷間にこだまするようである。その伝わっていく声は、大衆の大小にしたがつて、大きければ大きいように、小さければ小さいように伝わっていく。

人数に応じて伝わっていく。

非常に弁舌さわやかであったということから、お釈迦さんの舌は、広くて、長くて、やわらかくて、薄くて、だから細長い舌で、幅がある。それをのぼすと顔をかくして、頭髮の生え際まであるというんです。これは弁舌さわやかであったということにもなるし、例えば竜は口をあけると舌がぺろっと出ています。あれは竜の氣韻というか、威力的なものをあらわしていると思います。そういうものに例えているのでしよう。舌は赤銅色である。これも健康体であるということです。

両頬はふくれたようにもあり、ちようどそれは獅子の頬のようである。仏像を作る時でも、少し下ぶくれにした方がかわいらしい感じになるんです。頬骨を高くすると、人間くさくなつて、やさしさが出てこない。だから、お釈迦さんの頬の表現が仏像ではむずかしいのです。

耳は厚くて、幅広で大きい。そして長い。耳朵（耳たぶ）はたれ下がっている。耳朵環といわれるものです。その両耳はきれいで、その大きさや形は左右平均している。

顔全体は、長くもなければ短くもない。大きくもないし、小さくもない。円満であつて、端厳であると言ふんです。その顔からは妙なる香りが出ている。顔の輪郭は、大らかで、満月のようである。しかも輪郭がはつきりしていて、光沢があつて美しい。顔の相は、なごやかであつて、やすらかで、口元には笑みを含んでいる。見る人が、喜びを感じるようなそういう表情であつて、憂いに眉をひそめるとか、青い顔をしたり、赤い顔をしたりしていない。そしていつも若々しく、年をとっていない。お釈迦さんは八十歳で亡くなったのですから、八十は八十の顔になっていると思いますけれど、非常に若々しいという

ことでしょう。首から上の頭部は、周囲が丸くて、妙なる形である。その上に肉髻の部分がある。何とも言えないいい格好だということです。

次に体の方においていくのですが、肩は、両肩の肉が豊かで丸味があり、円満である。怒り肩とかなで肩とか、筋肉のへこみとかがなくて丸いということです。体の姿は端正で、背すじがまっすぐ。上半身は、円満な相で、ちようど獅子の王のような威厳がある。体全体は長大で、端正である。われわれ常人とは違つて、特に偉い人は大きく見えるものです。だから人々はお釈迦さんはわれわれより倍以上大きいと思つたのでしよう。では寸法的にはどのくらいのかといふと、一丈六尺だと言つています。約五メートルです。坐ると半分になるので半丈六という言い方をしています。体は、縦、横、同じだと言ふんですが、それは両手を広げた横幅と、頭頂から足までの縦とが



仏の手の指は細長く 爪も細長い

